子供の描く苦い恋

come猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
子供の描く苦い恋

【Ｎコード】
Ｎ０７９７Ｘ

【作者名】
ｃｏｍｅ猫

【あらすじ】
ある日の昼休み、止まっていたものが動き出す。

昼休み

昼下がりのうららかな休み時間、俺たちは小さなカフェで昼食を摂っていた。

いつもの時間に、３つほどしかバリエーションがないメニューを選び、木造の椅子に腰を下ろし、何気ない会話を交わす。

「俺は飯塚さんより松木さんのほうが人望あると思うけどね」

「いや、松木さんはあれでいて中々あくどい。近いうちにボロをだすよ」

「なんだ、通ずるところでもあるのか？」

そういって、ふざけ気味に笑う。

「いんや。ただ、あの人は変態だから」

嫌に神妙な顔。

「どうして？　ＳＭクラブにでも通ってたのか？」

少し笑いが引きつる。

「いや、勘だ」

「勘かよ……」

なぜかがっかりする俺。

「けど、あの人は、わきまえのないサディスト気取りだから。少なからず上からは目、付けられてるよ」

「あれ？　俺はけっこう優しくされてるんだけど」

「あの人、ゲイだし」

「……早くクビにならないかな」

「そろそろ戻るか」

俺は立ち上がるが、なぜか悪友は立ち上がらない。不思議に思っていると、
「いや、まだ戻らない」
「どうして？　午後からの集会に間に合わないぞ」
俺たちの会社は昼休みの終わりに、午後からの仕事のスケジュールの確認と、誰が何をするかを割り振る。
「問題ない。今日の俺らの班長は鹿浦さんだ。あの人なら巧くやる」
「……どっこいしょ」
俺は腰を下ろした。

集会をサボり、他愛のない話を繰り広げていると、俺の後ろ（悪友の正面）から声がかけられた。
「あの、お二人とも戻らないんですか？　集会、始まっちゃってますけど」
声に驚き、軽く悲鳴をあげた後、ニヤニヤと笑っている悪友に嫌な予感を感じながら、後ろを振り向いた。
「あ……、代（しろ）ちゃん」
「私は代塚です。先輩、サボりですか」
「そういう代塚こそ、サボりじゃないのか？」
悪友の鋭いツッコミ！　代塚は２０のダメージ！
「先輩たちを探しにきただけです」
「昔からまじめだねー代ちゃんは」
この後輩、代塚は小学校からの後輩なのだが、何かとまじめぶる。どうも、人の目を気にするけど、悪い事はする、といったタイプなようだ。そして口論に弱い。
「先輩は相も変わらず不真面目ですね」
けなすような、決まった返し言葉のような物言い。無論、彼女の顔はにやけている。

「君ほどじゃあないよ」
「そうそう、代塚はバカだ」
「なんでそうなるんですかっ！」
代ちゃんは腕をぶんぶんと振り、悪友に必死の抗議。
「いや、まだ悩んでいるのかなー、とね……」
「なっ！？　な、なな何のことでしょうか」
しかし悪友はドSであった。ご愁傷様です。
「ふ、今なら言えるぜお嬢さん？」
「……遠慮しておきます。では、二人は見つけられなかったことにしておきますので」
そういって、すたすたと歩き出そうとしたところを悪友に捕獲された。
「はっ、離して下さいっ！」
「そうだよ、捕まえてどーすんの？」
「お前は黙ってろ。そして瞑想をしていろ」
意味は分からないがとりあえず従う。
「さて、代塚。用件は了解してるな？」
悪友のあくどい笑い声が聞こえる。
「先輩には関係のない話じゃないですか……」
一方、代ちゃんは泣きそうな声。これは瞑想なんてしている場合なんだろうか。
「いや、ある。お前のせいで俺に彼女ができない」
「……どうしてですか？」
「お前が俺について来るからだろーが！　昨日、ある女の子に言われたんだ『代塚さんって、可愛いね……』この一言の意味、わかるな？」
「ちょっと待ってください。語弊があります」
語弊ってなんだろう。
「私は別に先輩について回っているわけではありません」
「じゃあ、毎日俺たちの後ろについてきたことは間違いじゃないっ

てわけだ」
あれ？　そんなことといったっけ。
「……それは、事実ですけど」
「じゃあ、代塚は、今！　瞑想なんてしてるバカに！　ついて回ってたというわけだな！」
「待てコラ。俺の今までの瞑想時間返せ」
「否定は？」
無視された。
「……しません」
「んじゃ、思いを伝えろ」
「……嫌です。できません」
「といってもなあ？　おまえ、大体の流れはわかったろ？　その先の結論も」
俺は嘘をつく。彼女が泣くのは嫌だから。

「先輩、ほんとにわからないんですか……？」
「うん、さっぱりだ。良かったら教えてくれないか？」
笑いかける。
「絶対いやですよっ」
そういって、顔を火照らせて、笑ってくれた。
「さ、戻ろうか？」
「はいっ！」
「いや、戻んないよ？」
「……え？」
悪友は　ハッピーエンドが　大嫌い。

サボり

うららかな昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
その音が沈黙を打ち消し、小さなカフェで佇んでいる俺は言葉を発した。
「戻ろ「戻らない」
……。
「まあ、座れよ二人とも」
俺は無言で頷き、座ろうとする。
「……嫌です。私は戻ります。戻らないのは先輩たちだけにしていてください」
「代塚、後悔するぞ？　そして公開するぞ？」
「後悔ならもうしていますっ！」
軽いギャグは流されます。
「なら、当たって砕けろよ。当たったまま逃げるなんて卑怯にもほどがあるぞ？」
ちなみに、代塚は当たっていません。
「……何度も言いますけど。言えるわけないじゃないですか、今の**この人に**」
代ちゃんはいい子だ。
「本当は伝えたくて、でも言っちゃいけなくて……！」
優しいし、気配りもできる。
「私、どうしたらいいかわかんなくて……」
それに純情でちょっと不真面目。
「先輩の……バカァ……！　うえぇぇーん……」
俺は、慰める事しかできない。
「ごめんね、代ちゃん……。泣かないで……」
背中を擦ってあげようとすると、手を握られた。

「泣くぐらいなら想いを伝えろよっ……チッ！」
さすがに、これには怒るでしょ。
けど。
でも。
言い訳が、次々とでてくる。
何に、何を、弁解するのか。わからないままに。怒った。
「おい、言いすぎだろ。代ちゃんの気持ちも考えろよ……！」
「そういうお前は考えてんのかよっ！　アァ！？」
右拳が俺の左頬を殴る。
痛いとも言えないし、考えているとも言えなかった……。
「お前がいつまでもうじうじしてっからわりーんだろうがっ！　そろそろ現実とも向き合えよ……！」
どうして、俺は、何も言えないんだろう。言い訳は得意だったのに。
「過去じゃなくて、今を見てもいいじゃねーか！」
その通り、だった。わかってはいるんだ。
「お前が幸せなほうが、アイツだって喜ぶんだよ……」
「もう、いいです、先輩」
俺は、声のするほうを向いた。
自然に。
涙が出た。
「私は、先輩が好きです。初めてあったときから、好きでした。ずっと、一緒にいたい」
わかっていた。
全部、知っていた。
答える事は、できなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0797x/

子供の描く苦い恋

2011年9月27日13時25分発行